

## 編集後記

「第 36 回天文学に関する技術シンポジウム」は、平成 28 年 12 月 15～16 日の 2 日間、国立天文台（三鷹）で開催いたしました。初めに、シンポジウム設立当時から関わるものとして経緯を説明しておきます。当時の天文台の風潮として、技術職員が研究会に出張したり発表したりするのは「けしからん」と言われていました。しかしながら、地方に観測所が設立されて技術職員が多くいるのに技術的交流が極めて少ないという危機意識から、交流を計り技術成果を発表して天文学に貢献しようではないか、と考えたことが設立に向けた動機でした。当時の岡山天体物理観測所の技術職員が主体となり、そこに、堂平観測所、木曾観測所の職員が加わり設立に至りました。関わる組織からわかるように、当初は光学分野でシンポジウムが始まりました。その後、電波関係も加わり可視光から電波領域を網羅したシンポジウムとなりました。報告は、当初は望遠鏡保守関係が多くありましたが、やがて観測装置開発関係が増えてきました。例えば、シンポジウムでの ALMA 受信機開発の報告は多大な評価を受け、シンポジウムが意義深いものとなりました。設立計画から約 38 年が経過しました。この間、設立後もシンポジウムの運営、進行に貢献された人も故人になったり、退職されたりで、設立の趣旨を理解して運営に関わる人はごく少数になり、私も 36 回の今回でお終いです。装置開発、望遠鏡保守、関連する技術を報告し継続するためにも、技術シンポジウムが今後も続けられることを願います。

さて、今回のシンポジウムですが、招待講演 3 件、口頭発表 6 件、口頭発表+ポスター5 件でした。招待講演は国立天文台重力波プロジェクト推進室の麻生洋一氏、北見工業大学の三浦則明氏、国立天文台チリ観測所の中村光志氏に講演をお願いしました。麻生氏は「超精密技術が拓く重力波天文学」のテーマで重力波とはなにか、その観測手法はどんなものか、そして 2016 年に世界を驚かせたノーベル賞級の重力波初観測の成果について報告いただきました。重力波研究を行うプロジェクト KAGRA の建設に、国立天文台で開発した技術が深くかかわりを持っているという解説に感銘しました。三浦氏は、「太陽補償光学系における並列処理技術」のテーマで京都大学飛騨天文台 60 cm 太陽望遠鏡における補償光学系の開発経過、将来の要素開発について講演いただきました。中村氏の講演は「生産性を 2 倍にする方法」のテーマで、今までのシンポジウムではなかった試みとしてセミナーをしていただきました。従来のシンポジウムにはない講習は参加者のなかに興味深かったとの意見が多数寄せられ、良い企画だったと思います。講演ですが、体調不良で直前になり講演を止めざるを得なかった方があり心配しましたが、可視光から電波まで含め、興味ある発表で充実したものでした。招待講演の皆様、一般講演の皆様に感謝します。

運営については当初 5 人の世話人で運営できておりました。ところが、シンポジウム中は出張で不在、別の会議に出ざるを得ない事情で欠席の方がいて、シンポジウムを乗り切れるか不安でしたが、影の世話人に表舞台にでていただき、大変助かりました。予定していた講演が直前でキャンセルせざるを得ない事情でプログラムを組み直した結果、懇親会まで空き時間が増えて参加者のお腹を減らせる羽目になりましたが、そこは乾杯に続いておいしい食事に舌鼓を打つにつれ霧散し、そこかしこで天文技術談義に華が咲きました。エクスカッションは、4D2U シアターと天文歴史資料館の見学を行いました。拓け行く宇宙の立体映像の驚異の姿、また国立天文台の歴史とともに歩んだ望遠鏡、その時代を背負った観測装置の解説に参加者の皆さん興味を持たれたようです。案内いただいた天文情報センターの遠藤勇夫さん、中桐正夫さんに感謝申し上げます。

至らぬ世話人代表でしたが、それを強力に補ってくれた世話人の皆様を紹介します。都築俊宏、中里剛、稲田素子、藤井泰範、篠田一也、長山省吾、佐藤直久（以上敬称略）。これら世話人によってシンポジウムを運営終了することができました。感謝します。

（世話人代表 野口本和）